
ダークサイド・ムーン

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダークサイド・ムーン

【Nコード】

N7582Z

【作者名】

アリス法式

【あらすじ】

- ダークサイド・ムーン -

さあ、空白の三千年を語り始めよう。

最後の歯車を、世界に投げよう。

勇者と魔王、そしてすべてに捨てられた想像主の物語を。

彼らが、彼女達が、世界に生まれた意味を、ぶち壊す物語を。

女神の眠り（前書き）

ダークサイド・ムーン

こちらは、鬱展開です。

正直、落差が激しいです。

女神の眠り

それは、彼らが転生者と成って何回目の転生の時だっただろうか。

転生のごとに徐々に崩壊する人格、削られていく『人間』であったころの記憶。

あるとき彼は言っていた。

「いつか、俺は、戦っている相手が桜だと認識できなくなるのだろうか？」

と。

あるとき彼女は語った。

「もう疲れた、この不毛な戦いも、誰ともわからない『勇者』を殺し続ける生活も・・・」

そうして、彼らが互いを認識できなくなった時。

私も壊れたのかもしれない。

「お帰りなさい『導き手』殿」

白々しいまでのその声が、私の喉から出たのだと言つのが信じられなかった。

彼らの、壊れた関係を見守り続けるのが悲しかった。

彼らの、壊れた笑顔を見るのがつらかった。

だからこそ、これは、これだけは私の本心だ。

この、嘘つきだらけの私の、多分、唯一残った最後の良心だ。

「今度こそ、幸せに成るのよ、紅葉、桜」
クレア サクラ

そして、ごめんなさい紅葉。

貴方が、最後の記憶の欠片と共に私に託した願いは、かなえられそうにないわ。

と、最後の消えかかる意識の中で思い出す。

それは、彼が『彼』であった最後の日。

転生前に彼が託した最後の願い。

「末の弟を、蓮をよろしくお願いします」

と、私にお願いして来た彼。

ごめんなさい、紅葉、桜。

謝ることしかできない私を許してください。

そう、咳いた後、

腕の中で抱きかかえていた無垢な魂が、ゆっくりと世界に還っていきのを見送りながら。

私は、静かに目を -

- 閉じた。

ごめんなさい、蓮。

貴方を救えない私を、許してください。

女神の眠り（後書き）

．．．。

きついです、序盤でかなりきついです。

oppだけで正直アップアップです（泣）

でも、書きます、がんばります。

だから、応援よろしくお願いします。

黄昏（前書き）

一話目です。

できるだけ、できるだけ暗く成らないように――

黄昏

真っ白な空間、どこか神殿のような雰囲気をかもし出した部屋。

その中央におかれた円卓とそれを囲むように配置された六脚のイス。

いま、そのイスは一つを除き、本来の役目を果たしていた。

『どうだい？彼女の様子は』

そのイスの一つに腰掛けた主から発せられた声、それは、どこか高く性別を曖昧とさせた声だった。

『ふむ、相変わらず眠りについておるよ』

返事をしたのは、老練な話し方に似合わない幼い声。

『まあ、たかが一魂を無理やり時空転移させたんだ、反動も来るっ
てもんだよ』

続いたのは、艶っぽい妙齡の女性の声。

『ほほほ、何が楽しくて作り物ごときに肩入れするのじゃて』

こちらは、しゃべり方にあった老人の声で。

『あの人は・・・甘すぎる』

最後に聞こえてきたのは、幼い少女の声だった。

『確かにね．．．』

と、女性の声がため息をつくとき、それに、同意するように、周りからも同じようなため息が聞こえてくる。

『でも、優しくはないな』

一同が、しんみりと静まり返ったところで、静かに幼い老練な声がかしこみ始めた。

『結局、彼女は最後の駒をほおっておいたままじゃ．．．守るでもなく、慈しむでもなく、捨て置いたのじゃから』

『そうね、ゆだねたのか、あきらめたのか、私にはわからないけど、艶やかな声がそれに続く。』

『ほほほ、ならば、我らで最大の歓迎をしてやらねばな』

最後に、しわがれた老人の声がその場を締めた。

それは、神々の円卓、すべての世界の裁量を任された者達の集いの席。

そこで、これから現れる少年の運命が決まろうとしていた。

黄昏（後書き）

ちなみに、外伝なので章の幕間しか外伝を挟まない兄勇妹魔と違って、唐突にストーリーと関係のない話を挟むかもしれせん。

孤独（前書き）

クライクライクライ！！

孤独

僕は、小さなころから嫌われ者だった。

幼稚園のころの記憶は、年上の子供達に小突き回されたこと、保育士さんにことあるごとに殴られたことだった。

「あなたは、何でほかの子と同じことができないの」

と、頬を殴られたのは、何度あっただろうか？

小学校に上がってもそれは変わらない、担任の先生からは同じ言葉を吐かれ、教室に行けば机はまともにおかれて無かったし、上履きをまともにはいた記憶も無い。

唯一、優しかったのは、七つはなれた双子の兄と姉だったのだが、結局二人も行方不明になった。。。

僕をかばって・・・、消えた・・・。

あの日、何が起こったのか、結局僕にはわからなかった。

ただ、警察に保護されて家に帰ってきた僕を見た母の目だけが印象

的だった。

刺す様な、怨むような、そんな瞳、決して実の子供にむけてはいけない目をした母の第一声は。

「貴方が、変わりに消えれば良かったのに！」

だった。

そして、その発言を諫めるものも、咎める者もいずに、僕は、兄と姉を失った僕は・・・

世界から孤立した・・・。

まともに、食事も与えられず、とはいえ、ようやく中学生になったばかりの僕がバイトなどできるはずも無く。

まあ、面接の時点で落ちただろうけど・・・。

そんな、生活が何年か続いた・・・。

それでも、何とか生き残った・・・。

きつと、悪運だけが強かったのかもしれない。

だって、生き残ってしまったのだから、母と父が死んだ時

火事だったそうだ・・・。

たまたま、鍵を無くして家に帰れなかった・・・。

それだけの話しだったはずなのに。

僕は、帰る意味も無かった、それでも僕の家だった場所も失った。

親戚が引き取ってくれるはずも無いと思っていたが、母の姉である人が引き取ってくれた。

そのころ、僕は高校生になっていた。

生傷の耐えない華奢な身体、伸ばしっぱなしの髪、やせすぎなのか、年齢にそぐわない幼い顔立ち。

そんな僕と、始めて顔を合わせたおばさんの反応は。

「今まで、シヨタは病気だと思っていたけど、君を見たらあいつらの気持ちもわかるわ・・・」

だった。

そして、おばさんが、おねーさんが住んでた家が僕の新しい家になった。

ちなみに、初対面でおばさん呼ばわりしたら、5メートル位吹っ飛ばされた。

でも、それでも、その痛みは、久しぶりに優しかった。

良く、小さいころに本当の意味で叱ってくれた兄達を思い出す痛みだった。

「学校に行きたくない？じゃあ行くな！

おまえ、一人位養ってやる！」

と、ぶっきらぼうに言ってくれた時は、本当に嬉しかった。

ただ、僕の髪を綺麗にすいて、女の子の格好をさせようとするのがたまに傷だったけど。

その数年間は、その生活は、今まで生きてきた中で一番充実していた。

でも、だからこそ、ばちが当たったらしい・・・。

ねーさんの知り合いが、借金抱えて夜逃げしたらしい、保証人はお約束・・・。

借金取りに、追いつめられて、職を失って、家に閉じこもったねーさん。

それからは、うわごとのように、死にたいと呟くようになったねーさん。

でも、いいと思うんだ・・・。

「私と、一緒に死のう・・・蓮」

とか、よく言われるけど、いいんだ。

僕は、もともと、世界に未練など無い・・・。

だから、一緒に死のう。

もう・・・。

「僕を置いて行かないで・・・」

それが、僕の最後の言葉。

燃えていく家の中で姉さんが優しく笑っていた・・・。

その瞳は、もう何も映してはいなかったけど。

楽しそうに、嬉しそう、悲しそうに・・・笑っていた・・・。

それが、僕の最後の記憶。

そうして、僕こと 柏木^{カシワキ} 蓮^{レン}は18年の生涯を閉じた。

孤独（後書き）

書いてて、泣きたくなってきた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7582z/>

ダークサイド・ムーン

2011年12月26日23時47分発行